

響き合い生かし合う社会活動をする人を紹介する

シヤカカツの人

Vol.
1

さまざま
な価値観に
触れて
視野を
広げら
れる場を

「インタビュー」京都Tera・Coya代表 小林光長氏





京都 Tera.Coya
代表 小林 光長氏
インタビュー

さまざまな価値観に触れて 視野を広げられる場を

シャカカツ、つまり、社会活動をしている人はどのぐらいいるのでしょうか。どんな人が、どんな思いで活動しているのか伺い、広く知ってもらうべく、大学生仲間子ども食堂を始めた「京都Tera.Coya」の代表・小林氏に話を聞きました。

現在の活動について

毎週土曜日に「子ども食堂（現在はお弁当）」と「フリースクール」を交代で開催しています。フリースクールの日は、子どもたちといっしょになにかを作ったり学んだりしています。以前は、毎回子ども食堂でしたが、大学生のスタッフが多いので、いっしょに勉強するなど、もう少しゆとり関わる機会が欲しいなと思いました。

スタッフの構成は？

大学生と社会人が混じっています。学生は30〜50人、社会人が10人ぐらいです。一回の開催につき、そのうちの10〜20人のスタッフが参加しています。開始当時は7名ほどで、全員学生だけでした。大学生だけで子ども食堂を作り、その学生が卒業したり新たに社会人が加わったりして社会人が増えていったという感じです。

活動はいつから？

2018年に始めました。2017年に京都市の子ども食堂の手伝いに行ったのがきっかけです。すでに社会人でしたが大学に行き直して、社会福祉士を目指していました。授業の一貫として子ども食堂の手伝いに行ったとき、年齢が近い大学生の存在

プロフィール

1983年生。右京区在住。路上生活や少年院での暮らしを経験。社会人を経て公認心理師になるべく30代で大学に進学。その後、社会福祉士を目指すうち「子ども食堂」と出会い、学生仲間と「京都Tera.Coya」を立ち上げる。多世代の多様な価値観に触れて視野を広げることの大切さを実感しており、子どもたちの将来的な選択肢を増やせたらと、毎週末、左京区で活動している。

が子どもにとって重要だと感じ、学生が継続的にボランティアに関われるようなサークルのようなものを作ることになりました。コロナ前は分担して数カ所に行っていました。が、現在は、このサロンだけです。

スタッフの役割分担は？

ある程度は分かれています。でも、関わる学生たちにとって、ここがいろいろなことを挑戦したり経験したりするきっかけにもなってくれたらと思っていますので、固定しないようにしています。私自身、飲食業界にいましたし、塾に勤めていたスタッフもいますが、飲食業界にいたスタッフだけが料理をするわけではなく、塾講師経験があるスタッフだけが勉強を教えるわけでもありません。

メニューの決め方について

子どものリクエストを聞くこともありますが、野菜など食材を寄付していただいたりしますので、その日にあるものをベースにメニューを考えています。スタッフのなかには管理栄養士の学生もいて、そういった学生がアウトプットする機会にもなると思うので、彼らの話も考慮してなにができるか考えることが多いです。



「食事をしたり勉強を教えてもらったりしながら聞く話は、社会学などで聞く話とは違うと思うんです。子ども食堂のなかでそういう場が増えていけば」と語る小林さん。インタビュー中、何度も子どもが迎えにくるほど慕われている

食材の調達について

最初は畑を借りて子どもたちと野菜を育てていましたがコロナ禍で難しくなり現在はできていません。農家さんからお声掛けいただいたり、お米や野菜を寄付していただいたりしています。ありがたいです。

はじめたきっかけについて

お恥ずかしい話、私はボランティアとか福祉とか、まったく縁がない暮らしをしていたんです。子ども食堂に手伝いに行ったとき、一日だけですが「自分にもできることがあるのだ」という実感を持てたのは大きかったです。そして、子どもに「来週も来るの？」と聞かれたんです。その日だけのつもりだったので戸惑ったんですが、「来



みんなで軽食を作る日。慣れた手つきで焼きそばに味つけしている子どもたち



かけ算も暗唱ではなく、楽しく覚えられるようにサイコロのゲームをしたりする

週も来るよ」と答えてしまっただけで今日まで続いています(笑)。子どもと関わる仕事をしていけば別ですが、知らない子どもと関わるきっかけはあまりないですよ。正直なところ「子どものために」という考えはありませんでした。でも、子どもにしてみればそんなことは関係ない。勉強を教える。いっしょにご飯を食べる。それだけのことなのに、子どもたちにとってすごく意味のある時間だとわかったことが大きかったと思います。

子ども食堂に継続的にお手伝いに行くなかで、最初に頼まれたのが「フィリピンの子どもたちに対して学習支援してもらえないか」ということ。彼らは日本語もあまり話せない状態でした。実際に子どもたちと交流してわかったんですが、日本での生活になじめないという課題がありました。そこで、子ども食堂をして、そこに国籍を問わず、いろいろな子どもたちが来て交流できたらと思ったのが、この活動の最初きっかけです。

活動での苦労や気づいたことなど

子ども食堂の数は年々増えていますが、それぞれカラーや手法が異なり、地域性があつたりします。スタッフのミートイングがよく話すのは、子ども食堂がどうあるべきか。答えのない難しい問題です。学校でも家でもない。ゆえに、学校や家と同じことをやるべきか、だからこそほかのことをやるべきか。難しいところです。マナーについても、ご飯の食べ方、玄関の靴など、スタッフそれぞれ考え方が違います。それを伝えるべきか、家や学校と切り分けて自由にさせるべきか。基本的にスタッフに任せています。京都Tera・Coyaとしてどうあるべきか、ほとんど設定しないよ



地域通貨のような「Teraコイン」。稼いだり売ったり子どもたちが使い方も考える

うにしています。なにが正しいのか本当にわからないので、みんなで考えていくことが一番重要なかなと思っています。

悩みとしては、週に一度しか開催できていないこと。さほど告知していないのに、30〜40人ぐらいの子どもが毎回来てくれます。これ以上増えると対応できなくなつて断らなければいけなくなつてしまいます。人手、場所、資金面に余裕があれば、もう少し、大きなことができるのかなとは感じています。そんな状況のなか、今できることを精一杯やらせてもらっています。

大切にしていること

生活のなかでは関われなさそうな人たちと関わり合うことが「子ども食堂」の良さだと思っているんです。知らない人たちと出会うことで、子どももスタッフも、多様な価値観に出会い、視野が広がっていくと思うんです。子ども食堂に来たことで、将来的な選択肢を少しでも増やすことができたら、すごくうれしいなと思います。

今後のこと、期待すること

まず、遊びに来ていただきたいです。助けていただくというより、いろいろな方に関わっていただきたいんです。こちらの方針を提示して、なにか指示してお願いします



ガラス戸に描かれたらくがき。少し元気がない子にはあえて「描く？」と誘うことも

のではなく、みなさんのやりたいことや得意なことを取り入れて、私たちも形を変えていきたい。それがまた、子どもたちやスタッフにとって新しい経験や価値観の幅が広がるようなことにつながればと思います。私自身、若いころに家を出たこともあり、家族以外のさまざまな背景の大人と関わり、いろいろな意味で影響を受けました。このスタッフも、電車の運転士や、看護師などさまざまな人が、京都だけではなく、大阪からも来ています。社会においてどう生きていくか。親以外のいろいろな大人と関わるなかで価値観の幅を広げることが大切だと実感しています。

ボランティアというイメージしがちな「〇〇してあげる」という意識のなかには、その先がない気がします。大人、子どもと分けて、みんなの居場所という意識を強く持っています。私を含むスタッフがみんな楽しいと感じ、スタッフもまた来たいと思えなければ、子どもたちに伝わるものも伝わらない気がして。いろいろな人がついでに来てしまう、そういう楽しい場を作れたらと思います。今後は、京都の子ども食堂同士はもちろん、地域の企業さんや、農家さんたちとも繋がっていききたいです。

紹介した社会活動団体について

Information



活動日時：毎週土曜日 14～19時
活動場所：左京西部いきいきサロン
活動内容：①てらこや子ども食堂
②Tera.Coya Freeschool
参加費：子ども 無料 / 大人 お気持ち制
代表：小林光長
メール：teracoya.kyoto@gmail.com

「子ども食堂」は単に「食」を提供する場ではなく「食」というコミュニケーションツールを通して交流する「場」だと思います。多世代が食べながら交流するなかで自然発生的に生まれるものを形にしたいです。関わるみんなが主体的な発想に転換できる場でありたいです。

ボランティアスタッフ
募集中！！

INSTAGRAM



『シャカカツの人』発行に寄せて

見るべきことが見えるように

左京東部いきいき市民活動センター センター長

杉山 準

フィリピンから日本に来られた方の支援をおこなっている女性にお話を伺ったことがあります。その方もフィリピンのご出身で、苦勞されながらシングルマザーとして日本で4人の子どもの育てた経験をお持ちです。そのお話のなかで印象に残ったことがいくつかありましたので、そのことをまずはお話しします。

その方は日本人である夫のDVに苦しみ最終的には離婚されるのですが、最初に相談をしてから自分がDV被害者であると気づくまで、2年かかったということです。2年間！ まずその年月に驚きました。そして、彼女は自身の経験から困っている人を放っておかず、フィリピンにルーツを持つ女性の支援を始められたそうですが、どのように困っているかの具体的な内容に目が開かれる思いをしました。「日本に長く住んでいても、日本人の夫に頼っていると、話せるけれど読書書きができない人が多いです。バスに乗れない人もいます。子どもの学校のことや予防接種の情報、ゴミの出し方、買い物すら大変です……」。そして、そうした方々がすぐ近くに暮らしているという事実。遠いどこかの話ではなかったのです。

また、私はフィリピンの方は英語が話せると思い込んでいました。しかし、英語が話せるのは教育を受けた方で、一般の方が使うのはタガログ語やビサヤ語やワライ語といった伝統的な言葉で、英語を話せない人もいるということです。先

日、フィリピンにルーツを持つ方へ日本語支援などをおこなっている団体の方とお話をする機会がありました。しかし、そうした民族言語のことは触れられませんでした。そうしたことを知らないかみんな英語が話せると思っているのではないかと感じました。ちなみに、前述のフィリピン人女性は民族言語で困りごとへの対応をしているそうです。

「DV」「子どもの居場所」「ヤングケアラー」「孤独死」「性的マイノリティ」などの単語で語られる問題について、多くの方は報道を目にすることで「知っている」つもりになってしまいます。しかし、そうした問題は案外近くで起こっているかもしれません。また、問題の根は想像以上に複雑で、「貧困の問題」「コミュニティの問題」「情報が行き届かない問題」など複合的な事情が絡んでいることが多い可能性があります。そして、そうした問題の根について、自分も含めた社会全体で考えていかなければならないことだと受け止める人はどれくらいおられるでしょう。

前述の女性のように、社会の問題に対して行動を起こしている人がいます。報道で取り上げられる事例もありますが、多くはあまり知られていないと感じています。そんな方々をまずは知ること。そして、その人たちのお話から課題の実情を知り、それを市民の方々と共有するのがこの事業の目的です。「問題の根」が伝わることを願いつつ。



杉山 準 (すぎやま じゅん)

演劇プロデューサー／特定非営利活動法人劇研理事長／京都市左京東部いきいき市民活動センターセンター長
2000年より2008年まで京都の小劇場『アトリエ劇研(げっけん)』プロデューサー(劇場は2017年閉館)を勤める。
2003年に当劇場を管理運営するNPO法人『特定非営利活動法人劇研(げきけん)』を立ち上げ理事・事務局長に就任し現在に至る。当法人は2011年から京都市の施設左京西部いきいき市民活動センターを、2015年からは左京東部いきいき市民活動センターを指定管理している。演劇プロデューサーとして舞台芸術の振興ならびに、文化・芸術を通じて社会に貢献する事業を企画制作するとともに、左京東部いきいき市民活動センターのセンター長として多様な市民活動の支援をおこなっている。

[取材協力]

京都 Tera.Coya 小林 光長氏

[発行日]

2023年3月19日

[発行]

京都市左京東部いきいき市民活動センター / 指定管理者 特定非営利活動法人劇研 令和4年度市民の社会関与を促進する事業 取り組み1 市民活動団体活動勉強会

〒606-8432 京都市左京区鹿ヶ谷高岸町3-2 TEL 075-761-1385 FAX 075-752-3350